沼津市歴史民俗資料館

資料館だより

Vol.36 No.4（通巻193号）

2012.3.25（年4回発行）

寄贈資料の中から　髪を整える道具

今回は、資料の中から髪を整える道具を紹介します。これらは、女性の髪形に大きく影響され発達しました。江戸時代中期以降には、髪を結い上げる習慣に伴って多彩な髪形が生まれ、櫛（くし）、笄（こうがい）、簪（かんざし）が髪飾りとして発達しました。素材や工芸技法も多様になりました。

梳櫛（すきぐし）は歯の細かい櫛で、髪を梳（す）いて汚れを取り除くものです。片歯と両歯があり、梳くときに反対側の歯を傷めないように鞘（さや）をつけたものがあります。写真の資料は、細く削った竹を糸で組んで作られています。

鬢出（びんだ）しは髪を結う際に左右の髪（鬢（びん））を膨（ふく）らませるのに用いるもので、歯が長いのが特徴です。

筋立（すじたて）は、髪を結った後に毛筋を整える櫛で、横幅が広く、鬢出しよりも歯が細かいのが特徴です。

挿櫛（さしぐし）は、結った髪の乱れを整えたり、髪に挿して飾るものです。

笄（こうがい）は、髪を巻いて髷（まげ）をつくったり、髷に挿して飾るものです。初めは髷をつくるための道具でしたが、次第に、髪を結ってから髷に挿し込み飾るようになりました。櫛と笄は揃いのものを使うことが好まれるため、同様の意匠が施されたものが多くあります。

簪（かんざし）は、束ねた髪をおさえて保持する道具で、髪飾りとしても用います。江戸時代中期頃は、笄との区別がしづらかったために、笄と同一視されていました。その後、耳かきがつくなどして形状が変化することで、笄とは別の髪飾りとして発展しました。

解かし櫛は結った髪を解かすための櫛です。セット櫛というのは、戦後にパーマネント・ウェーブが流行してから生まれたもので、柄の部分を使って髪を取り分けたり、ロッドに巻き込んだりします。

束髪用簪（そくはつようかんざし）は、大正時代初期に束髪（そくはつ）が流行し、広く用いられるようになったもので、洋風の新しい意匠が好まれました。

髪ごては、髪にウェーブをつける道具です。火鉢で温めて使いますが、こてをあてる前に、髪が焦（こ）げないよう、新聞紙を挟んで熱の具合をみます。こてで髪にウェーブをつける髪形は、大正時代半ば頃から流行し、昭和時代初期まで続きました。

カーラーは巻き髪に使うものです。写真の資料はアルミ製で、夜寝る前に髪を湿らせてこれに巻き、翌朝外します。

駿河湾の漁

鈴木真司さんの漁話

イカラ（碇）の使い方

漁場へ着いてイカラを下ろし、夜通しイカを釣ったが、イカラの上げ下ろしにも技術がいるものだ。

船がひとところに留まって、流されないようにイカラを下ろすが、駿河湾の海底は起伏が多く、ひっかかりの悪いところもある。親父のような古い漁師は、魚群探知機がない時代でも、魚がよく釣れる場所を覚えていたし、海底がネ（岩場）なのか、砂地なのかを知っていた。そして、イカラヅナ（碇綱）の長さと、海の深さを、常に意識していた。

自分が親父と一緒に乗った、チャカ（電気着火式発動機搭載小型漁船）にも、イカラが積んであった。一抱えする大きさで、船のオモテ（前方）に立って、海へ投げ入れるのだが、イカラヅナに足をとられると、海へ落ちたり怪我をしたりするので、慎重に投げたものだった。イカラは、錘と鉤爪の付いたほうを下にして、平らに海へ投げたが、放してしまえばオレの自由にはならないから、どっちが上でどっちが下で、どんな格好で底に着くのかはわからない。

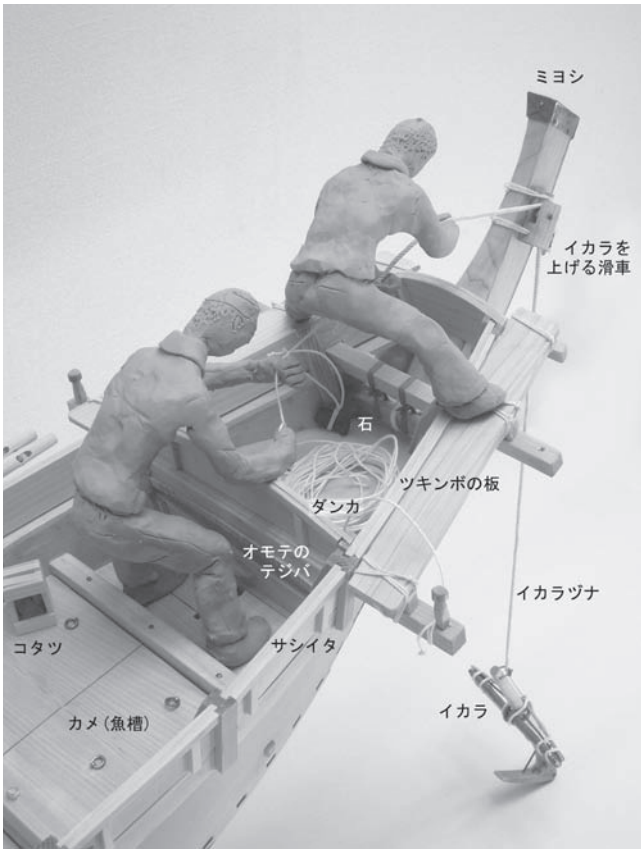
イカラが海底に着くと、イカラヅナがもう下りなくなるが、そのままではイカラはひっかからない（図①）。そこで、20ｍくらい余分にイカラヅナを投げてやり、イカラの着いた地点と船とを離して、イカラヅナが斜めに張るようにする（図②）。そうすると、イカラの鉤爪が海底に食い込んで、船が固定される。

思い出してみると、こうして余分にイカラヅナを伸ばすことを、親父は「ヒャー」と言っていた。「ヒャーをやれ」と言われて、イカラヅナを下ろした。

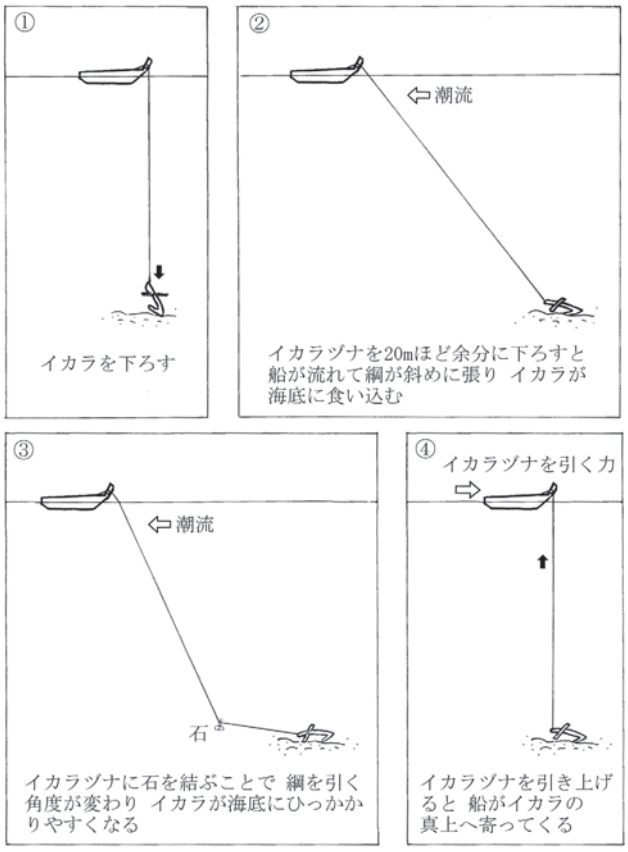
どうしてもイカラがかかりにくいことが、一度だけあった。そのときは親父に言われ、イカラから少し離したところに、石を縛りつけてイカラヅナを沈めた（図③）。そうして、イカラの爪がより深く、海底に食い込むようにした。

漁を終えてイカラを上げるのが、また一苦労だった。親父がペラ（スクリュー）を下ろして梶を挿し、道具をしまって帰る準備をする間に、オレがイカラを上げた。オモテのテジバ（手釣りをする場所）に足を開いて立ち、腰を深く曲げて、イカラヅナを引いた。ミヨシ（船の先端）にイカラを上げるための、大きな滑車を取り付けてあり、それを使った。「ヒャー」をした分の20ｍほどは、楽にイカラヅナが上がってくるのだが、イカラの真上に船が来ると、とたんに重くなった（図④）。ひっかかりが外れて、イカラが起きるまでが大変なので、そうすると親父が来て、一緒に引いた。オレはツキンボの板の上でイカラヅナを引き、親父がテジバで引きながら、ダンカ（船の先端部、排水構造になっている）へと、イカラを上げた。

（話：鈴木真司氏 沼津市大平在住）



イカラを上げる様子（チャカ船模型製作・寄贈 鈴木真司氏）



イカラの使い方

資料館の調査ノートから⑰

建切網漁の伝統を引き継ぐ内浦湾最後のマグロ漁

内浦長浜　菊地敬二さんの話

今回は、昭和30年８月末に内浦長浜で行われたマグロ漁について、菊地敬二さん（昭和６年生まれ）から聞き取りを行った内容をご紹介します。

１．戦後１回きりのマグロの群れ

戦後（第二次世界大戦後）にマグロの群れが来たのは、昭和30年８月末の１回きりだった。マグロが10年以上来ていなかったので、当時は戦前のマグロ建切網漁で使ったオオアミ（大網）は使っておらず、魚群を見張る魚見小屋のあるオオミネにも誰も登っていなかった。

このときのマグロ漁で使った網は、戦前のマグロ建切網漁で使っていたシメアミ（締網）だった。シメアミは、マグロの群れが来なくなった戦後も、バショウイカ（アオリイカ）・ウズワ（マルソーダガツオ）・シブワ（ヒラソーダガツオ）などを捕るために使っていた。網代の締網場（しめあみぼ）のそばに専用の網小屋があり、引っ張り出せばすぐに浜へ出すことができた。このシメアミを使った漁は、漁期になると、建切網漁でマグロを捕ったときと同じ網代の締網場で行われ、昭和37、38年頃まで続けられた。

この昭和30年８月末のマグロ漁は、建切網漁と同じシメアミを使ったことから、建切網漁の伝統を引き継いでいたが、このような漁法は、内浦湾全体をみてもこのときが最後といってよいだろう。昭和30年は、自分が４月に結婚した年でもあり、50年以上たった今でも、この年に起こった出来事は忘れられない。

２．マグロの群れの発見

オオミネに漁師が登っていなかったのにマグロの群れを発見できたのは、自分の父（傳治郎）のマグロ漁の経験に基づく感覚によるものだった。

父から聞いた話では、この日の朝、小沢の網干場で年配の漁師２人と一緒にイワシ網の補修をしていたところ、岸の近くでゴションという音がしてマグロが跳ねたのではと感じた。そこで、小峰台（こんめんでぁー）にあった２階建ての資料館（現在の伊豆三津シーパラダイスのラッコ館のところ）の屋根に上がり、マグロが来たことを確認して、仲間に指示を出した。

それから、マグロが来たと村中が大騒ぎになり、前夜のイワシ漁から帰ってきて家で寝ていた漁師たちも起こされて、網代の締網場に集結した。父は、このときにマグロを発見し、網代のミネ（約12m）で漁の指示を出したことを亡くなるときまで誇りに思っていた。

３．初めてのマグロ捕り

この日、自分たち仲間３人は、前夜の漁で捕れたイワシを沖でイケスに入れた後、そのまま発動機船でイワシを活かしたまま引っ張ってきて、昼前後ぐらいに内浦長浜前のイケス係留場に着いた。そのとき、いつもイケスをつなぐためにあったロープが外されていたので、おかしいなと思ったが、まさかマグロ漁が始まっていたとは知らず、当番の家でイワシの大漁の祝い酒を４～５人で飲んでいた。すると、年配の漁師から、「マグロが来ているのがわからないのか。」と怒鳴られたため、席を立ち、網代ですでに始まっていたマグロ漁に加わった。イケスをつなぐロープが外されていたのは、マグロの通り道になっていたからだった。

60～75kgぐらい（体長：約1.5～２m）の大型のキハダマグロが、５本、８本、10本というように次々と来たので、２艘の船で交互にシメアミを使った。先の網を締め終わると同時に、次の網を建てるといったように、繰り返して行った。

網で締め込まれたマグロを捕るときには、シビカギとカケヤを使った。自分はマグロ漁が初めてだったので、シビカギの使い方は、先輩の菊地茂晴さんが手本を見せてくれた。

腰丈ぐらいまで海に入ってマグロが来るのを待ち、マグロが泳いできたところを、鼻面がかわった時点（構えたシビカギのカギの上を鼻面が通った瞬間）でシビカギを上に向けて引き上げると、ちょうどシビカギでマグロのノドを引っ掛けることができた。マグロは泳いでいるので、ノドが来た時点でシビカギを上げると、タイミングが遅れて腹の方に引っ掛かり、人間が逆に沖へもっていかれるため危険だった。

シビカギをノドに引っ掛けた後も、マグロはそのまま泳いでいて勢いがあるので、シビカギを引っ掛けられたままで浜まで上がってきた。

シビカギを使うのはベテランでないとできなかったが、自分の場合は、菊地茂晴さんが見ていてシビカギを上げるタイミングを教えてくれたので、初めてだったがうまくノドに引っ掛けることができた。

マグロが浜に上がってくると、浜にいる仲間の漁師がカケヤで眉間を一発バーンとたたいた。たたいてパッと一気に仕留めないと、体に血が回ってしまい、鮮度が落ちて値段が下がってしまうためであった。

４．沼津市場への運搬

マグロが盛んに捕れ始めると、自分は発動機船のエンジンの係だったので、マグロを沼津の市場へ運ぶ役に回った。発動機船は２隻あり、１回に１隻あたり10～20本ぐらいを５～６人で市場へ運んだ。

10数年ぶりでマグロが捕れたので、意気揚々として船に大漁旗を立てて市場へ運んだが、すでに妻良・子浦（南伊豆町）で捕れたマグロもたんと上がっていた。マグロの全体数が多かったので、思ったような値段がつかなかった。

市場に着くと、マグロを船から下ろして競り場まで運んだ。その後、競りで仲買人に買われたマグロは、ハラワタ（内臓）を抜かれ、長細い箱へ入れられ氷をいっぱい詰められて、東京の築地市場へ貨物列車で直送された。

５．夕方と翌日のマグロ漁

最終便の運搬が終わって夕方帰ってきたら、マグロは見えなくなっていたので、これで今日の漁はおしまいだということになり、網代の浜でマグロのハラワタを鍋で煮て、これを肴にマグロが捕れたお祝いをしようということになった。

自分たち一番年下の漁師（下番士）が、４～５人でハラワタを煮ていたところ、海でコシャンという音がした。すぐに「マグロが入った。飛び込め。」という号令がかかり、自分たちは海に飛び込んだ。このときに捕れたマグロは、10 本だった。この 10 本は、発動機船のカメ（船槽）の中に氷と一緒に入れておいて、翌日の朝に市場へ持っていった。

翌日は、マグロが続けて来るだろうということで、網を張り、早くからオオミネにも登って待っていたが、前日のように大型のキハダマグロは来ず、４kgぐらいの小さなキハダマグロが来た。

前日からの２日間で捕れたマグロの合計は 200 本ぐらいになったが、この後、再びマグロの群れが、網代の締網場に来ることはなかった。

６．マグロ漁を見た菊地昭代さんの印象

この年に菊地敬二さんと結婚した昭代さんは、１日目のマグロ漁が始まった頃に見に行った。

マグロが来たと村中で大騒ぎをしていたので、内浦長浜の人たちはほとんどが見に行った。漁師がみんな海に飛び込んで、マグロを横に抱えて浜へ上げるところが豪快で、今でも一番印象に残っている。

戦前まで行われていた内浦長浜のマグロ建切網漁図　部分
神野善治監修・千賀葉子作図（沼津市文化財センター所蔵）

資料館からのお知らせ

「ぬまづの宝100選」について

館所蔵の重要有形民俗文化財「沼津内浦・静浦及び周辺地域の漁撈用具」が「ぬまづの宝100選」に選ばれました。広報用の燦々レディーの取材がありました。

沼津市歴史民俗資料館だより
2012. 3. 25　発行　　Vol.36　No.4（通巻 193 号）
編集・発行　〒 410-0822 沼津市下香貫島郷 2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館　　TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436
URL:http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/rekimin/index.htm
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp

R100
古紙配給率100%再生紙を使用しています